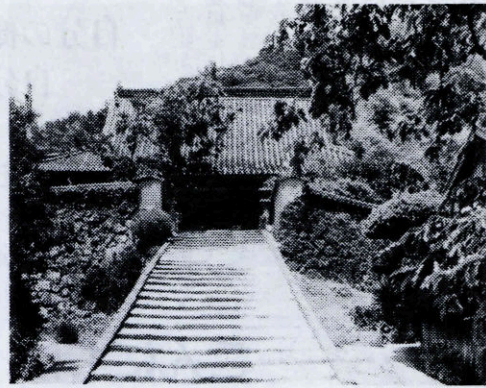


私のまちにも こんな ふるさとが



◎明恩寺（上中小野）

天文元年（一五三二）の創建。開基は道休、もと武士で俗名を伊藤惣兵衛といた。三隅上村字麓に一城を構えていた伊藤將監道輝の嫡男であったが、明応三年本願寺第八世の蓮如上人に帰依して直弟子となり、数年を上人のもとで過ごしたが、帰国するに際して御眞筆の御名号と御文章を賜り、「竹の下」というところに小庵を結んで、賜った御名号を本尊として念仏三昧の生活に入ったが、徳を慕った多数の御同行によって今の地に「宇が建立された、寺号公称は宝永七年（一七二〇）九月二十日であり、宝永十二年（一七二五）大正元年（一九一二）に二回全焼した。現在の本尊は阿彌陀如来の木像、御丈六十センチ、仏師康雲の作で法宝物は前記蓮如上人御眞筆六字各号一軸がある。

麓の集落に人家の果てる東北端すぐ、畠中への道からわかれて、奥山への林道を少し入ったところに、丘の突出したような地形がある。その北面や北東面は竹群や木立が土止めの役を果たしているが東面の一部は断崖を石壁が支えて由緒ありげに見える。上は平坦で木立がなければ眼界も開けそう。小さいながらも要害の地であることを思わせる。このあたりに一城を構えていたのが伊藤將監道輝だった。

以後数年を上人の側近に過して帰郷するや、帰郷に際し六字の名号一幅を下付された。この名号は上人最晩年の真蹟で今に伝存している。

道休は帰郷後かつての城には再び入らず、「竹の下」というところに草庵を結び右の名号を奉安して念仏の道場とした。山号「竹下山」はこれに由来する。道休（天文一九一五〇年一月八日没）は同行衆の懇念に支えられてのち、今の地に一寺を建てた。竹下山明恩寺の始まりであるが、寺はその後宝永七年（一七一〇）九月、六世住宗珍の代に願ひ出て本願寺から寺号の公称を許されている。他方、城主の末裔も引きつづき麓に居住していたが、その寄進になる

またこれに象徴されるように当寺は学匠の輩出も多く、迎えられて入寺した住職にもそれがあるのは随縁であろうか。たとえば若象（一七八〇〜一八三四）がそれで、内日の大乘寺より入寺して十二世住となったが（室は野波瀬極楽寺の出）、豊前（大分県）長久寺道隱門下の高弟である。当時は三業惑乱といつて真宗の安心史上に有名な大混乱があった。これに対処して邪義を糾した彼の功績は堂前に建つ頌徳碑に記すところ。碑は天保六年、長久寺鳳溪師の撰文、若象の没後一年の造立である。本堂外陣につるす大太鼓も若象の学恩を徳として寄進されたものである。

明恩寺の現住は十六世の長男義教師（一九〇九）であるが、十六世の没後その遺稿ともなった明恩寺史やその他の重要資料が所在不明となり、歴史の細部を明らかにすることができなくなったのをなげいている。

その長男伊藤惣兵衛尉は明応三年（一四九四）始めて上洛したときまたま本願寺八世蓮如上人（一四一五〜一四九九）の法話を聞き、上人について出家、直弟子となって法名を道休と賜った。

以後数年を上人の側近に過して帰郷するや、帰郷に際し六字の名号一幅を下付された。この名号は上人最晩年の真蹟で今に伝存している。

道休は帰郷後かつての城には再び入らず、「竹の下」というところに草庵を結び右の名号を奉安して念仏の道場とした。山号「竹下山」はこれに由来する。道休（天文一九一五〇年一月八日没）は同行衆の懇念に支えられてのち、今の地に一寺を建てた。竹下山明恩寺の始まりであるが、寺はその後宝永七年（一七一〇）九月、六世住宗珍の代に願ひ出て本願寺から寺号の公称を許されている。他方、城主の末裔も引きつづき麓に居住していたが、その寄進になる

またこれに象徴されるように当寺は学匠の輩出も多く、迎えられて入寺した住職にもそれがあるのは随縁であろうか。たとえば若象（一七八〇〜一八三四）がそれで、内日の大乘寺より入寺して十二世住となったが（室は野波瀬極楽寺の出）、豊前（大分県）長久寺道隱門下の高弟である。当時は三業惑乱といつて真宗の安心史上に有名な大混乱があった。これに対処して邪義を糾した彼の功績は堂前に建つ頌徳碑に記すところ。碑は天保六年、長久寺鳳溪師の撰文、若象の没後一年の造立である。本堂外陣につるす大太鼓も若象の学恩を徳として寄進されたものである。

明恩寺の現住は十六世の長男義教師（一九〇九）であるが、十六世の没後その遺稿ともなった明恩寺史やその他の重要資料が所在不明となり、歴史の細部を明らかにすることができなくなったのをなげいている。

文芸

清風句会

六月例会

（順不同）

筍や名もなき人の墓の傍
番傘の柿渋かはる夏の雨

笹見 梅雪

たずね来て筍ひとつ杣の寺
藻一とすじ浮き沈みして五月雨

齊藤 元

普茶料理開け放したる夏座敷
伽羅藪を箸休めとて壺白磁

田村 九重

さみだれのにはいたちこめ肌寒し
娘の優し竹の子わらび冷凍庫
五月雨に大川濁りて鮎おぼろ
青田中蛙うるさし雨模様

山崎 風花

筍やとなり屋敷に無断宿
降る前か蛙コトコト五月雨

池田 久子

五月雨に浮世の寝草語るなり
五月雨に濡れより添いて老夫婦

仁保 民子

小銭入れ形見となりし微財布
筍や伸び放だいの過疎の里

宮永ミネ子

さみだれて島影うすく舟もまた
味よしと貯へ料理微になり

岩本さつき

嫁三年家業に馴れて明易し
壁に染みありし場末の微の宿

滝口 旬一

味噌仕込む家伝来の微筵
捨てがたき姑の小袖に微臭う

岡 松月

野鳩くる明日も又来よバラと待つ
初夏薄闇縫いて窓に染む

山野タケ子

さりげなく咲いてゆられて桜草
すんなりと節も立てずに女子竹

山中 重女

療養の日記めくれば微くさき
微くさき系譜に我名書き加ふ

因藤 兔史

五月雨のある夜そとと淡き月
威勢よく伸び筍や天指して

竹内 奈美

選者追吟
さみだるる兼六園の浮見堂

永田 石山

竹の子の知って知らずや畑の中